

# 舞踊と音楽についての一考察

佐藤 節子

## 1. 目的

音楽は、舞踊の印象を左右させる要因の1つだと考えられるため、作舞する際には、動きと音楽をどのように関わり合わせて表現するかが課題となる。本研究では、この課題に迫るための手掛りとして、本研究がこれまで行ってきた舞踊の感情伝達に関する因子分析的研究の手法を用い、舞踊の印象が、音楽の有無によってどのように変化するかを調査分析し、動きと音楽はどのように関わり合って伝達されるかを探っていく。

## 2. 仮説

### (1) 仮説1

本研究者のこれまでの研究では、音楽を排除した舞踊の評定値をもとに因子分析を行い、“ダイナミックスタティック”といった力動性因子が第1に感じられてきた<sup>(1)</sup>。これに対し、音楽を伴う舞踊の因子分析の先行研究を紐解くと、金城は舞踊の鑑賞構造の解明を試みる研究の中で“評価性”“躍動性”“明瞭性”の3次元を提唱している<sup>(2)</sup>。また、頭川らによるいくつかの舞踊のイメージ分析の研究では“情緒性因子”“活動性因子”“調和性因子”“弾力性因子”等を抽出している<sup>(3)</sup>。一方、音楽のみを聞かせて因子分析を行った研究を見ると、中村は“快い弛緩”“陽気さ”“抑うつ”“緊張・力動性”の4因子を抽出している<sup>(4)</sup>。

本研究者のこれまでの研究と、先行研究の因子構造を比較すると、第1因子が異なる。つまり、音楽を排除した場合には、身体から伝わる力動性が第1に伝達されるのに対して、音楽を伴ったり、音楽のみの場合には、“評価性”“情緒性”“快い弛緩”といった感情の快・不快に関わる要素が第1に伝達されると推察される。これを仮説1とする。

### (2) 仮説2

バレエでは、ベジャールが「ダンサーが音楽を飲み込んでしまい、……身振りで音楽を聴かすのだ。」<sup>(5)</sup>と述べるような音楽と動きが一体化する表現が理想だと思われる。一方、モダンダンスでは、「必ずしも両者（音楽とダンス）が正確に同じ瞬間に起こらなければならないということの意味するわけではない」<sup>(6)</sup>とカニングハムが述べるように、音楽に同調しない表現もある。

こうした動きと音楽の関係を示す例を概観すると、本研究で扱う舞踊は、音楽に同調する表現を

していると推察される。これを仮説2とする。

## 3. 方法

評定者は、一般的な傾向を求めるため、舞踊の専門的な知識のない学生13人に依頼した。刺激は、従来の研究で用いた10種類の舞踊作品のビデオを用い、評定法は、35の片側の形容詞を4段階で評定する方法を用いた。評定期日は1990年10月で、各作品ごとに、初めに音楽を排除して、次に音楽を伴わせて見せ、そのつど評定を依頼した。解析手順は、まず、有効な評定を行った8人の平均値を算出し、音楽を伴う場合、排除した場合それぞれ、形容詞35語×舞踊10種類、の行列を作成し、因子分析を行った。解法は主因子法で、形容詞相互の相関係数マトリックスを求めた後、共通性の推定を相関最大値から求め<sup>(7)</sup>、基準バリマックス法による回転の後、因子負荷量を算出した。

更に、仮説2を検証するため、音楽を伴う場合と排除した場合を合成したデータ（形容詞35語×舞踊作品20種類）をもとに、因子得点を算出し、各作品ごとに、音楽を伴う場合と排除した場合の評定平均値の相関係数も求めた。

## 4. 結果と考察

### (1) 仮説1の検証

先に回転して解釈のつけられる因子だけを採用する方法<sup>(8)</sup>により、音楽を伴う場合は3因子、音楽を排除した場合は4因子を採用した。算出された因子負荷量のうち、±0.62以上の値を示す形容詞を各因子を代表すると考え、次のように因子の命名をした。

まず、音楽を伴う場合は、第1因子から順に“不快—快因子”“スタティック因子”“ダイナミック因子”とした。これに対して、音楽を排除した場合は、第1因子から順に“スタティック因子”“屈曲—伸展因子”“拒絶—容認因子”“ダイナミック因子”とした。

このように、音楽を伴う場合と、音楽を排除した場合は、因子構造が異なり、音楽を排除した身体動きのみからは力動性が第1に伝達されるのに対して、音楽が伴うと、不快—快感情が第1に伝達されると推察され、従って、先に立てた仮説1が確認された。しかし、このことを一般化させるには、より多くの評定者を対象にし、刺激と評定尺度をより吟味する必要がある。

### (2) 仮説2の検証

図1は、音楽を伴う場合と排除した場合のデータを合成して算出した因子得点と、第1、2因子を代表する因子負荷量のベクトル方向を、同一平面上に付置した図である。太い矢印は、各舞踊の、音楽を伴う場合から排除した場合への因子得点の変化を示す。この太い矢印に着目すると、各

舞踊は、次の2種類に分類できる。第1は、左右の矢印の変化の大きい、ホタ、サルプリ、諸鈍、レゴン、クラトン、喜び、湯女で、これらは、音楽によって快—不快感情が増大すると考えられる。第2は、音楽の有無に関らず印象があまり変化しない、シバ神に捧げる踊り、ジェルシス、瀕死の白鳥で、これらは、動きと音楽が同調する表現をしていると考えられる。

次に、各作品ごとに、音楽を伴う場合と排除した場合の評定者の平均値の相関係数を求めたところ、0.35のサルプリ以外は、0.67以上の高い値を示すことより、音楽を伴う場合と排除した場合の印象は、大変関連があると考えられる。

以上より、仮説2は訂正され、次のようになる。本研究で扱った舞踊のうち、サルプリ以外は、音楽を伴う場合と排除した場合の印象に、大変関連があり、動きと音楽が同調した表現をしていると考えられる。しかし、快・不快の軸上の変化に着目すると、ホタ、諸鈍等のように、音楽を伴うことによって、快・不快感情が増大する舞踊もあると考えられる。

今回は、動きと音楽の全体的な傾向を見るに止まったので、今後の課題としては、各舞踊の動きと音楽の同調の仕方をより細かく見ることが望まれる。

## 5. まとめ

音楽を伴う場合と排除した場合とでは、印象がどのように異なるかを探り、更に動きと音楽の関わり方を探るため、因子分析の手法を用いた。

その結果、音楽を排除した場合は、身体の力動性が第1に感じられるのに対して、音楽を伴う場合には、感情の快・不快が第1に感じられる事が確認された。

また、本研究で扱った舞踊のほとんどは、音楽を伴う場合と排除した場合の印象に、大変関連があり、動きと音楽が同調していると考えられる。しかし、その伝達に多少のずれが生じる舞踊もあり、音楽を伴うことによって、快・不快感情が増大すると考えられる。

今後の課題としては、これらの結果をより一般化させるために、評定者、刺激、評定尺度を検討し、各舞踊の動き

と音楽の同調の仕方をより細かく見ることが望まれる。

## [注釈]

- (1) 佐藤節子「舞踊の感情伝達に関する研究—跳躍舞踊とすり足舞踊の比較を中心に—」『埼玉女子短期大学研究紀要』第2号, 1991, pp. 35-64, 他.
- (2) 金城光子「舞踊の鑑賞構造に関する研究—意味微分法による—I-2, II-2」『琉球大学教育学部紀要』第17集, 1973, pp.27-72.
- (3) 頭川昭子・松浦義行・川口千代「意味空間における舞踊のイメージ」『体育学研究』24-4, 1980, pp.281-290, 他.
- (4) 中村 均「音楽の性格と情動」『心理学研究』54-1, 1983, pp.54-57.
- (5) Bejar, M.: Un Instant Dans La Vie D'autrui, (Paris: Flamarion, 1979). [前田充訳『モーリス・ベジャール自伝 他者の人生の中での一瞬』劇書房, 1987, p.274].
- (6) Cunningham, M. (Entretiens avec Lesschaeve, J.): Le Danseur et La Danse (Paris: Editions Belfond, 1980). [石井洋二郎他訳『カニンガム 動き・リズム・空間』新書館, 1987, p.195].
- (7) 芝祐順『因子分析法』東大出版会, 1986, pp.61-63
- (8) 中谷和夫「多変量解析」『社会科学・行動科学のための数学入門』6, 新曜社, 1988, p.34.

図1 (太い矢印は音楽のある場合から無い場合への変化を示す)

